仕合わせの和

第１９９号
Ｈ．３０．１０．１
（毎月１日発行）

六十九連勝の大横綱　双葉山

住職　谷川寛俊

今年の大相撲秋場所で、「横綱白鵬が全勝優勝」。しかも「通算千勝という前人未踏の大記録を達成」と、新聞紙上に大きく報道されていました。

今を遡ること実に１０６年前の明治四十五年、大分県の漁村で生まれた昭和の大横綱**双葉山**。彼は知る人ぞ知る、日蓮宗の大信者であり、大変熱心な身延山の大信者であることは、ご存知だったでしょうか。

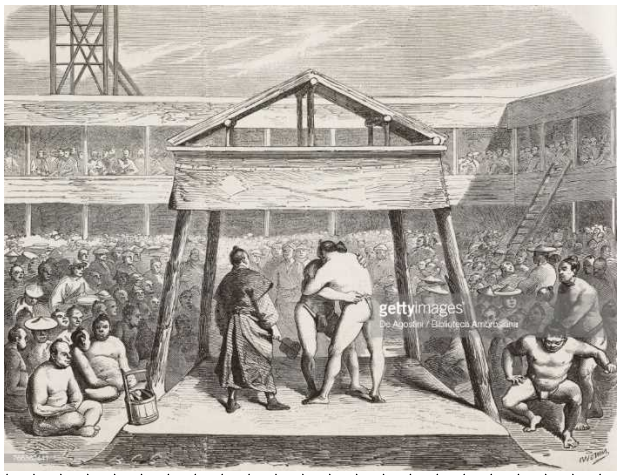
幼年時代から怪力の持ち主として知られ、家業の手伝いで船に乗り、強靭な足腰を作り上げたことが大相撲関係者の目に留まり、名門立浪部屋に入門しました。

家運が傾いたことが大きな１つの切っ掛けとなり、大相撲に入門し経済支援をしたかったというのが最初の目的だったようです。

序二段の頃、重い病気にかかって不調が続きました。悶々とした日々を送っていた時、東京の本山・堀之内妙法寺に住む、金丸妙正という尼さんの指導を受けるようになり、お題目の唱題修行に打ち込むようになると、次第に病も快復の兆しを見せ、取り組みの戦績も上がってきました。この体験以来、双葉山は熱心な法華経の信者となるのです。昭和１４年の夏場所中、妙正法尼が危篤になった時、横綱双葉山は一日休場すると病牀に駆け付け、不戦負を覚悟してまで、妙正法尼への恩義に報いたかったというほど律儀な人柄だったといいます。そして妙正法尼亡き後は、益々法華経信仰を続けることになります。そして迎えた翌年の夏場所、不振で途中休場を余儀なくされた時も、七面山の滝に打たれて唱題修行をし、復帰したという信仰的逸話も残っています。

また双葉山の立ち合いで有名なのが「**後の先（ごのせん）**」と言って、ユックリとした立ち会いで、相手に飛び込まれるが、攻撃は常に先行するという兵法で余程の自力がないとできない芸当でした。右四つから左上手で引き付ける力は群を抜いていたそうです。実は、代名詞となっている「後の先」を使うには理由がありました。彼は幼い頃、父の手伝いで右手の小指の第一関節から失い、更に吹き矢が右目に直撃し、ほとんど視力が無かったというハンディがあったからなのです。それでも彼は、お題目信仰を心の支えとして稽古に精進し、不滅の大横綱として今もなお、今をときめく白鵬をはじめとする力士達の憧れの存在として語り継がれているのです。

ところで双葉山が初めて身延山にお参りした時、当時の望月日謙法主猊下にお目通りの後、足の不自由だった法主猊下の車椅子を押し、境内を散策することになった時、自然に車椅子が、左の方向に進んだそうです。法主猊下は「双葉山関、あなた右目が不自由なのではないですか？」と、誰も知らない秘密を見破ったと言います。法主猊下の眼力には恐れ入ったと、自伝に書かれています。



日蓮聖人は「仏法は身体のごとし、世間は影のごとし。体曲がれば影なめなり」と御指南されています。法華経の教えを中心とした真っ直ぐな信仰によって、常に正しい姿勢をとることに精進努力をされたからこそ、不滅の大記録を歴史に刻むことが出来たのではないかと確信します。

「仕合わせの和」
と打ち込んで頂ければ、ホームページにつながります。

編集・発行
玉蓮山　真　成　寺
編　集　部　谷川久仁子
TEL・FAX　0765-22-2268
携帯　**080-3744-2523**
こちらの番号でもお寺につながります。